

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	四庫全書本『繫傳』の調査・文淵閣本と文津閣本
Author(s)	鈴木, 俊哉
Citation	広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究, 14 : 79 - 99
Issue Date	2019-12-31
DOI	
Self DOI	10.15027/48894
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048894
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの著作権・著作権は広島大学大学院総合科学研究科に帰属する。 Copyright (c) 2019 Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University, All rights reserved.
Relation	



四庫全書本『繫傳』の調査・文淵閣本と文津閣本

鈴木 俊哉^{1,2)}

¹⁾ 広島大学総合科学部

²⁾ 広島大学情報メディア教育研究センター

Comparison of the Siku Quanshu Edition of the Shuowen Jiezi Xizhuan —the First (Wenyuange) and last (Wenjinge) Versions

SUZUKI Toshiya^{1,2)}

¹⁾ School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

²⁾ Information Media Center, Hiroshima University

Abstract

“Shuowen Jiezi Xizhuan” (説文解字繫傳), written by Xu Kai (徐鍇), is regarded as one of the most comprehensive materials remaining the state of “Shuowen Jiezi” before the Song dynasty. The currently available editions of “Shuowen Jiezi Xizhuan” were handwritten or printed during the Qing dynasty, and their sources are still being investigated. Among them, the Siku Quanshu (4K) edition has many irregular variants in the heading seal glyphs those are different from other editions. To confirm whether these glyphs were mistakenly drawn, we compared the Wenyuange (文津閣, WYG) and Wenjinge (文津閣, WJG) versions. The WYG version was the first of the 4K edition, and the WJG version was the last of the 4K edition. As a result, we found that many of the variants were shared between the WYG and WJG versions, indicating that they came from a 4K source book that has been lost. However, some parts in the WJG version were found to have been revised with respect to the WYG version. The revised glyphs are compared with other editions. The comparison result implies that the revision used Wang Qishu edition (汪啓淑本), which was published just after the WYG version.

1 はじめに

『説文解字』[1](以下、説文)は西暦100年頃に後漢の許慎が編んだ字書である。漢字字形を当時通行の隸書ではなく、小篆に遡って分析した上で正しい字形を定めるという考え方は、その後の字書や正字政策に大きな影響を与えた。現在一般に使われるものは北宋初期に徐鉉が勅令により校訂

した、いわゆる大徐本を祖とする系列である。大徐本は当時通行していた資料に対し、文字学的な整合性を取るため改めたと考えられている[2][3]。

1.1 大徐以前の説文と小徐の著作

大徐本以前の説文の姿を推測する材料として重視されるものに、徐鉉の弟である徐鍇が南唐末に編んだ『説文解字繫傳』[4]がある(以下、小徐本または『繫傳』)。勅撰であった大徐本に比べ、

小徐本の流通は限定的であり¹、全体の姿が判るものは清抄本・清刊本しかない。また、現在通行の版本は宋代に張次立による校訂を受けたもので、そのまま本来の小徐本として扱うのは難しい。

これを踏まえて、徐鍇の別の著作『説文解字篆韻譜』[6](以下、『篆韻譜』)を用いて本来の小徐本の小篆を得ようと言う工藤早恵氏・糸原敏章氏にはじまる研究がある[7][8]。『篆韻譜』の小篆字形を調べてみると多くは現存する小徐本のうち述古堂本[9]に近いが、稀に述古堂本とは異なる場合もあり、四庫全書本『繫傳』や『汗簡』に近いものが見られる[10][11]。

伝統的には四庫全書本『繫傳』はもっとも早い清刊本である汪啓淑本[12]と底本を共有しているとされてきた。しかし、四庫全書の文淵閣本『繫傳』[13]の見出し字を全て調査すると、非常に違いが多く、文淵閣本と汪啓淑本は底本が別と思われることが判った[14]。文淵閣本特有の小篆は、おそらく誤りを含む説解や、通行の楷書字形などをもとに推定して作字したものと推測された。

1.2 汪啓淑本および四庫全書本『繫傳』の底本問題

上で述べたように、汪啓淑本の底本に関する伝統的な立場は、四庫全書の編纂を指揮した紀昀の家蔵本であるとする説である[15]。しかし、近年になり、董婧宸氏により、底本を翁方綱らの校本[16]であるとする説が出された[17]。

紀昀家蔵本もまた今日には伝わらないため、伝統的な立場は、四庫提要が四庫全書本『繫傳』の底本を紀昀家蔵本と書くことと、汪啓淑本の跋に**聖朝文治光昭館開四庫，淑得與諸賢士大夫游獲見繫傳稿本。愛而欲廣其傳因合舊鈔數本校錄付梓，其相沿傳寫既久無善本可稽，不敢以臆改也。**

と見えることから推測したものである²。

一方、董氏は翁方綱の校本と汪啓淑本が良く符合し、さらに翁方綱の『蘇齋筆記』には、汪啓淑に校本を貸し、刊行された後、翁方綱の名前を入れることを謝絶した経緯が書かれている³ことから、跋の「稿本」とは四庫全書を書写するための稿本ではなく、四庫館の諸賢士大夫⁴に由来する稿本と読むべきであるとした。

1.3 本稿の目的

文淵閣本の調査結果は、董氏の説を支持するものであった。しかし、「文淵閣本の小篆には他の版本と異なるものが多い」という結果に関しては、四庫全書の書写品質に関する疑問がありうる。文献[14]では、四庫全書薈要(以下、薈要)で書写された大徐本[18]と、その底本である汲古閣本[19]を比較し、若干の文字順序の入れ替え⁵、避諱のための欠筆などはあるものの、意図的に大幅な改変を加えたとは考えにくいとした。

しかし、事業の規模としては四庫全書と薈要にはかなりの差がある(四庫全書が収める文献が約3400種あるのに対し、薈要は500種未満である)。安定性の評価のためには、文淵閣本以外の資料での検証も必要という指摘もあるだろう⁶。これを踏まえ、本稿ではもう一つの四庫全書本である文津閣本『繫傳』について調査した。

以下、本稿では『繫傳』の名称、提要や跋文の引用、また説文小篆を指示する用途以外では基本的には日本の新字体を用いて表記する。また、ISO/IEC 10646:2017の中で工業標準化されていない字形が必要な場合はIDS[20]により表現する。

2 文津閣本について

2.1 調査に用いた縮印本について

文淵閣本・文津閣本の影印とその加工・流通状況については、笹原宏之氏が文献[21]に詳しく述べている。文淵閣本は様々なアクセスが可能になっている[22]のに対し、文津閣本は、商務印書館の縮印本が一種[23]あるに過ぎない⁷。

文淵閣本の影印の多く、たとえば四庫全書珍本叢書や、台湾商務印書館の縮印本は版心を残した影印となっている。一方、縮印文津閣本は図1に示すように、版心は全て削られており、原本における複数の頁を切り貼りして作られたものを3段に並べる形式である。大徐本・小徐本においては1段あたり18行で、おそらく原本では3頁相当の内容(大徐本・小徐本とも文淵閣本は1頁6行である)と思われる。

この縮印本での箇所から原本の葉・行を推定することは可能である。しかし、それらの情報が記

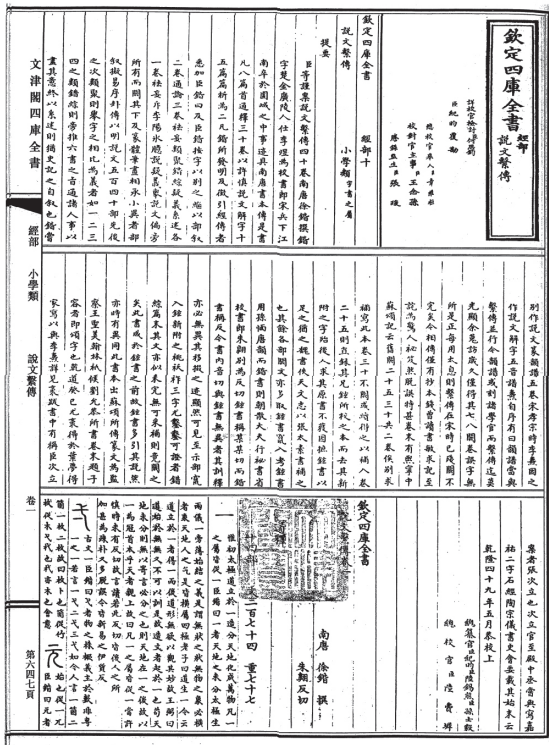


図 1: 縮印文津閣本の版面(繫傳)

載されていない縮印本では該当箇所を探すことは困難である。縮印文津閣本を文淵閣本と対比される研究者は注意されたい。

2.2 文津閣本の特徴

文淵閣本と文津閣本の関係は、一般的には正本と副本とされる[24]が、文津閣本は、乾隆52年からの勅令による大規模な再校正を踏まえているため最も正確と言われることも多い[25][26][27]⁸。しかし、実際には最初に書写された文淵閣本より劣る部分があることは戸崎哲彦氏が既に指摘している[29]。

戸崎氏の調査対象は『増廣註釋音辯唐柳集』という大部の文献であり、その底本となり得る版本の種類も多く、加えて混同され易い書名を持つ別文献⁹も存在する。文津閣本の混乱は、資料整理が不完全なために、底本の取り違えや編単位での脱落といった大規模な誤りが発生したものと分析されている。

底本の候補が複数あるものの、脱落ではなく改変と言えるレベルにとどまる例としては、馮先思氏が明らかにした『大廣益會玉篇』の例がある[30]。四庫提要は、当時通行していた澤存堂本や曹寅本を強く批判し¹⁰、四庫全書本は紀昀家蔵本

を底本にしたとする¹¹。しかし馮氏の分析によれば、文淵閣本は宋本に近いものの¹²、薈要本や文津閣本では部分的に澤存堂本によって説解を増補しており、資料評価が提要と整合しない問題がある。

四庫全書本『繫傳』の場合、底本となり得る資料がそれほど多数あるわけではないので、脱落のような深刻な誤りは発生していない。大まかな観察として以下のことが判る。

●「魚」のデザイン

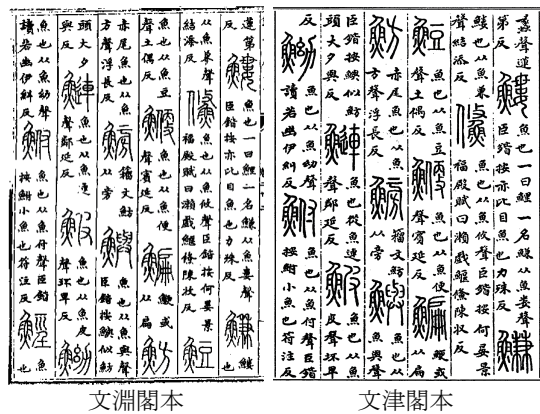


図 2: 文淵閣本と文津閣本の「魚」

文淵閣本の特徴として、部品としての「魚」のデザインを大徐本が「史籀筆跡」と呼ぶ字形、すなわち「𩺰」のように作るという点があった。これは文津閣本でも同様である(図2)。

●文字サイズの揺れ

四庫全書は多数の作業者が筆写する事業であるため、同一文献を複数の作業で平行して書写し



図 3: 文淵閣本『繫傳』巻01～19の冒頭

た可能性も充分考えられる。本稿では作業者数の見積りのようなレベルまでは踏み込まないが、見え易い特徴として文字サイズを考える。

各巻第1または第2葉から1行ずつ採取した。文字間隔に大きな揺れは見えない。



図 4: 文津閣本の説解文字サイズの揺れ

文淵閣本では、図 3 に示すように、1行あたりの文字数、文字サイズ、文字間の空白に大きな揺れは無い。一方、文津閣本では図 4 に示すように1行あたりの文字数は安定しているが、文字サイズ、文字間の空白に大きな揺れが見える。

またさらに図 5 に示すように小篆の文字サイズにも大きな揺れが見られる。この揺れは説解の文字サイズの大小と同期しているようには見えない。従って、説解と小篆は別々に書写された可能性が疑われる。

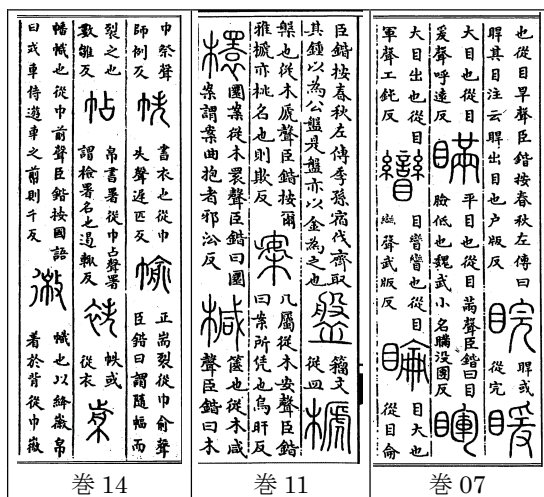


図 5: 文津閣本の見出し字サイズの揺れ

●書前提要の違い

文淵閣本『繫傳』の書前提要には、
…如鉉本「福、祐也」、此作「備也」。鉉本「業、耕多艸」、此作「耕名」。鉉本「速、前韻也」、此作「前頓也」。鉉本「鷗、大鷗也」、此「從爾雅作、天鷗也」。文鉉本「祭」字下、引禮記、「禱」字下、引詩之類。此作「臣錯案、禮記曰」、「臣錯案、詩曰」、則錯所引。而鉉本、滲入許氏者甚多。又如「饜」字下云「闕」、此作「家本無注。臣錯案、疑許慎子許沖所言也」。是鉉直刪去「家本無注」四字、改用一「闕」字矣。其憑臆刪改、非賴此書之存、何以證之哉。…

という部分がある。大徐本(鉉本)の説解が小徐本と異なるものや、許慎原本の文と徐錯の案語が混ざっているもの、さらには徐錯の案語を徐鉉が略記したため原本の状況が判らなくなっているものがあることを指摘し、小徐本と対校することでそれらの箇所を明らかにできているとしている。文献[14]では、この評価を根拠に大徐本と差が多い資料を優先して底本に選んだのではないかと推測した。

しかし、この部分は文津閣本の書前提要では全く削除されている。この文津閣本『繫傳』書前提要の日付は乾隆49年5月であるから、乾隆52年以降の再校正の影響はないと見て良いだろう¹³。もし削除の理由が、大徐本と小徐本の差に注目する意味が薄いと資料評価を改めたものであれば、文津閣本の状況は文淵閣本とは異なる可能性が疑われる。

3 比較結果

まず、全ての見出し字を切り抜いた結果、文淵閣本は10369字だったものが、文津閣本では10357字とさらに少なくなっている(祁寯藻本は10724字、汪啓淑本は10394字である)。

これを文淵閣本と比較した表の全体は資料[33]にて公開しているが、全てを精査するには膨大なため、本稿では、まず文淵閣本と文津閣本の対応が見つからない部分、次に文献[14]の表2,3,4に列挙された「文淵閣本の小篆が四庫全書本以外の版本と目立って異なる部分」の状況を確認する。

以下に本章での記法について整理する。

- 文淵閣本を淵本、文津閣本を津本と呼ぶ。
- 汪啓淑本・述古堂本・祁寯藻本について共通である場合、これらをまとめて「他版本」と呼ぶ。大徐本や段注本は含まない。
- 「他本」と呼んだ場合、津本に注目している文脈では淵本・他版本を指し、淵本に注目している文脈では津本・他版本を指す。
- 見出し字の有無や対応関係について、小篆・古文・籀文の分類が不要な場合、単に「篆体」と呼ぶ。
- 篆体を指示する番号として、祁寯藻本の篆体の通し番号(古文・籀文・或体にも1つずつ振る。ただし説解の中の篆体は無視する)を用い、K00001～K10724と表記する。
- 篆体・説解中の字形を適切に指示することが難しい場合(例えば字形に特殊な訛がある場合など)、IDSによって表現する。

3.1 対応不能部分

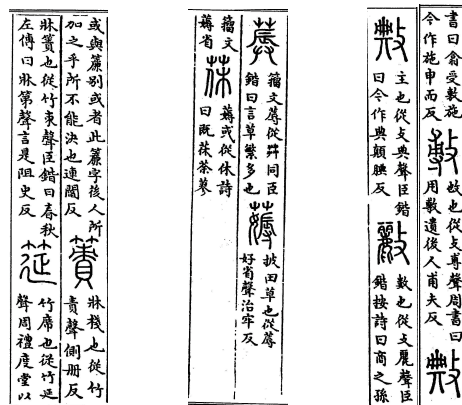
まず淵本と津本が対応しない部分を簡単にまとめたものを表1に示す。

表 1: 淵本・津本『繫傳』対応不能部分

- : 他版本と同様であるもの
- 全脱: 篆体・説解とも欠けるもの
- 脱篆: 篆体のみ欠けるもの
- 冗篆: 篆体が連続して2回書かれるもの
- 訛篆: 他版本と比べて全く異なる篆体であるもの
- 錯位: 篆体と説解の対応関係がずれるもの
- 大徐: 大徐本で補ったことが明白なもの

見出し字番号	卷	淵本	津本
K00068(禡, 禡, 禡)	01	○	全脱
K00347(蕒)	02	○	全脱
K00753(蕒)	02	○	脱篆
K00820(櫻)	03	○	全脱
K01044(嬰)	03	○	全脱
K01455(躋)	04	○	全脱
K01456(躍)	04	○	錯位
K01544(賈)	05	○	全脱
K01729(諫)	05	○	全脱
K01730(諫)	05	○	全脱
K01845(調)	05	○	全脱

K02007(輶)	06	○	全脱
K02036(鍵)	06	○	全脱
K02225(敷)	06	○	冗篆
K03201(笨)	09	全脱	○
K03232(第)	09	○	脱篆
K03704(疾)	10	○	脱篆
K04177(棖)	11	○	冗篆
K04249(不)	11	錯位	○
K04338(曄, 曄, 曄)	12	○	全脱
K05884(裸)	16	訛篆	脱篆
K06233(頤)	17	全脱	○
K06234(頤)	17	全脱	○
K06323(髻)	17	全脱	○
K06590(碌)	18	錯位	○
K06620(碯)	18	○	脱篆
K07535(懣, 懣)	20	○	全脱
K07611(蕊)	20	大徐	全脱
K08348(寵)	22	○	脱篆
K08379(齏, 齏)	23	訛篆	錯位
K08398(闌)	23	○	冗篆
K09434(紛)	25	大徐	錯位
K09478(寧)	25	大徐	冗篆
K09746(蛇)	25	大徐	全脱
K09853(峙)	26	○	錯位
K10002(務)	26	○	錯位



K03232(第)脱篆 K00753(蕒)脱篆 K02225(敷)冗篆

図 6: 脱篆と冗篆の例

K03232: 篆体の領域を確保しない脱篆の例

K00753: 篆体の領域を確保する脱篆の例

K02225: 行頭に余分な空白を確保した冗篆の例

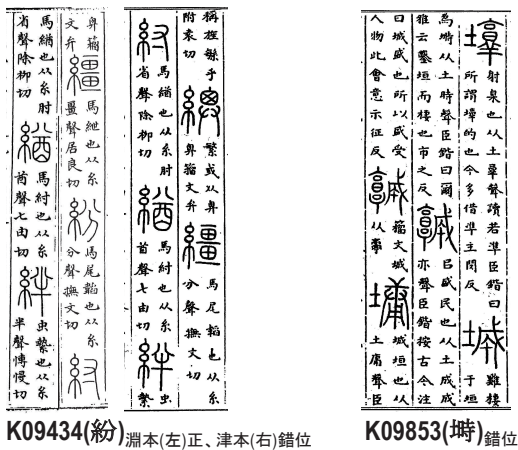


図 7: 錯位の例

K09434: 途中の脱落により、無関係の篆体と説解が組み合わせられる例

K09853: 篆体の書き込みがずれた例

「全脱」以外の箇所での状況を以下に詳述する。脱篆、冗篆、錯位の例を図6と図7に示した。

- K00753(蕘): 淵本ではK00752(薺)の籀文(籀文薺省)。他版本も同様。津本は篆体を書く空間が確保されているが空白(脱篆)。説解は次の行頭から書かれる。
- K01456(躍): 淵本は「迅也。従足翟聲。以畧反」とする。他版本も同様。津本は篆体・説解とも掲出せず、次項のK01457(踰)に移る。しかし、津本のK01454(踊)は説解が「跳也。従足甬聲。以畧反」となっている。K01455(躋)が全脱した上、さらにK01454(踊)の篆体・説解の大半と、K01456(躍)の反切が組み合わせられた状態になっており(錯位)、途中のK01455(躋)の説解とK01456(躍)の篆体・説解の大半が脱落した結果と解釈できる。
- K02225(敷): 津本はこの篆体を前頁の末尾に1回書き、さらに次の頁の冒頭で再度同じ篆体を書いた後、説解を書く(冗篆)。
- K03232(第): 淵本は「牀簣也。従竹翟聲。臣錯曰、春秋左傳曰牀第聲言是。阻史反」とする。他版本も同様。津本では説解のみ書かれており(脱篆)、篆体を書く空間は確保されていない。
- K03704(疾): 淵本はK03703(疾)の古文(古文侯)とする。他版本も同様。津本は説解のみ書かれており(脱篆)、その直前の行末に篆体を書く空

間が確保されているが、書かれていない。

- K04177(枳): 津本はこの篆体を前頁の末尾に1回書き、さらに次の頁の冒頭で同じものを書いた後、説解を書く(冗篆)。
- K04249(不): 津本は「古文櫛。従木無頭。臣錯曰、指事也」とする。他版本も同様。淵本においてはこの説解を篆体「櫛」(他本に見えない)に対応づける(錯位)。また、他本はK04250(梓, 梓)に「此又古文櫛」と注するが、淵本ではこの説解をK04249(不)に対応づけてある。淵本にはK04250(梓, 梓)の篆体は見えない。
- K05884(裸): 他版本はK05883(羸)の或体(羸、或従果作)とする。淵本は篆体を「羸」に誤る¹⁴(訛篆)。津本は説解のみ掲出し、篆体を書く空間が確保されていない(脱篆)。
- K06590(礫): 津本は「礫也。从石豸聲。臣錯曰、今作墜。徒佩反」とする。他版本も同様。淵本は次項K06591(碩)の篆体と、この説解を並べており、結果として、本項の篆体およびK06591(碩)の説解は脱落している(錯位)。
- K06620(磳): 淵本は「春已復搗之曰、磳、从石沓聲。道合反」とする。他版本も同様。津本は行頭から説解を書き、直前の行末には篆体を書く空間は確保されていない(脱篆)。
- K08348(龕): 淵本は「龍髻脊¹⁵上龕龕。从龍干聲。丁帖反」とする。他版本は「...龕龕也。从龍干聲...」と1字異なる以外は同様。津本は行頭から他本と同様の説解(也を含む)を書く。この前行末に篆体を書く空間が確保されているが、書かれていない(脱篆)。
- K08379(齧, 齧): 淵本は「鹹也。从鹵差省。河内所謂之齧。沛人言若虚。臣錯曰、按禮、鹽曰齧。殘陀反。」とする。篆体は「齧・齧」に作るが、説解に「差省」と言う通り、この字形は不正確である(訛篆)。他版本は篆体を「齧・齧」に作る。津本は篆体が次項のK08379(鹹)になっている(錯位)。ただし次項K08379(鹹)は篆体・説解とも他本と同じである。
- K08398(闞): 津本はこの篆体を行末に1回書き、さらに次の行の冒頭で同じものを書いた後、説解を書く(冗篆)。
- K09434(紛): この項は現行小徐本では全て欠巻

して大徐本で補っている巻25の項である。淵本では「馬尾韜也。从糸分聲。撫文切。」とし、他版本も同様である。

津本では前項K09433(纒)は篆体は正しいが、説解はこの項K09434(紛)のものになっている(錯位)。結果として、K09433(纒)の説解とK09434(紛)の篆体が欠けている。

- K09478(寧): この項も現行小徐本では全て欠巻して大徐本で補っている巻25の項である。淵本はK09477(總)の古文(古文總从糸省)とするが、篆体は「𠄎𠄎𠄎思」に作る。他版本の篆体は「寧」である。津本の篆体は淵本と同様だが、行末に1回書き、さらに次の行の冒頭で同じものを書いた後、説解を書く(冗篆)。
- K09853(峙): 淵本は「雞棲于垣為峙。从土時。臣錯曰、爾雅云鑿垣而棲成。市之反。」とする。他版本は、「從土時聲」とする他、同様である。津本は、この説解¹⁶に対して次項K09854(城)の篆体が示されている。また次項K09854(城)では津本は次々項K09855(馘)の篆体を示しており、篆体と説解の対応関係が一項分ずれた状態となっている(錯位)。この対応関係のずれは、次々項K09855(馘)で解消されるが、そのため篆体の「馘」が2回書かれる。
- K10002(務): 淵本は「趣也。从力攷聲。臣錯曰、言趣赴此事也。勿赴反。」とする。他版本も同様である。

津本ではこの説解に対して次項K10003(劈)の篆体が示されている。また次項K10003(劈)では次々項K10004(勸)の篆体を示しており、篆体と説解の対応関係が1項分ずれた状態となっている(錯位)。この対応関係のずれは、K10005(勅)の項で解消されるが、そのため篆体の「勅」が2回書かれる。

表1の概観として、対応不能部分の多くは津本の脱落と見ることができる(淵本は全脱が4ヶ所、これに対し津本は全脱15ヶ所に加えて脱篆が6ヶ所)。ただし、例外的に巻17～18の範囲では淵本で脱落していたものを津本では補ったように見える。説解が書かれているのに篆体が脱落するパターン(脱篆)は津本にしか見えない。

またさらに津本に特徴的なものとして、説解を挟まずに篆体が2回連続して書かれるパターン(冗篆)がある(4ヶ所)。全て、ある行末に篆体を書き、さらに後続行の冒頭にも同じ篆体を書き、そこから説解を書くパターンである。行の途中で2回篆体を連続して書いた例は見つかっていない。

篆体と説解の対応がずれるパターン(錯位)は、淵本に2ヶ所、津本に5ヶ所見えるが、その発生経緯は、図8に示すような2つの異なるものが推測される¹⁷。

まず、単純なものとしては、篆体Bを書いた後、説解bと次の篆体Cを書き飛ばしてしまい、篆体Bと説解cが対応づいた項ができるというものである(錯位(A))。この場合は篆体・説解対応のずれは連鎖しない。K09434(紛)の津本の状況は、このような経緯で発生したと推測できる。

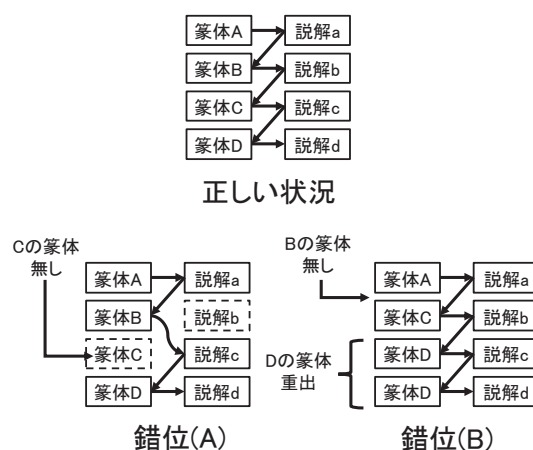


図8 推測される錯位発生経緯

もう一つは、篆体Bを書くべきところに次の篆体Cを書いてしまい、篆体・説解対応が1つずれた状況が連鎖的に発生し、後に篆体Dを2回書いて強制的にずれを解消するというものである(錯位(B))。K09853(峙)の津本の状況は、このような経緯で発生したと考えられる。

3.2 文淵閣本特有の篆体の出現状況

本節では、文献[14]の表2,3,4に列挙されている、淵本に特有の篆体字形について津本の状況を確認する。

篆体は汲古閣本[18]、淵本[13]、津本[23]、汪啓淑本[12]、述古堂本[9]、祁寯藻本[34]¹⁸を掲出した。

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邨
K04775	百	13	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K04802	径	13	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K04991	氣, 気, 汽	13	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K04992	蹊	13	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K05076	詠	14	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K05393	帶, 带	14	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K05411	區, 區	14	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K05584	裸	16	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06252	百	17	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06560	履	18	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06577	卅, 卅	18	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06581	譽	18	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06583	罈	18	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06597	磁, 磁	18	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06679	徒	18	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K06877	角, 角	19	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邨
K03046	的	08	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03113	刑, 刑	08	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03115	劄	08	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03451	登	09	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03453	鼻	09	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03639	叨	10	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03663	恰	10	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03671	火	10	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03783	麥	10	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03798	臺	10	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03819	韓	10	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03848	籽	11	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03873	號	11	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K03984	罍	11	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K04050	輪, 幹	11	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K04084	驥	11	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨

表 2: 淵本の篆体がほぼ別字であるもの

項番: 那高漢本における篆体の通し番号
 対応字: 那高漢本における篆体に対応する現代漢字(四庫全書本は対応しない場合がある)
 巻: 小倉本における掲出巻番号
 毛5: 汲古閣本(5次修訂本)119の篆体
 淵: 四庫全書文淵閣本113の篆体
 津: 四庫全書文津閣本231の篆体
 汪: 汪啓敏本112の篆体
 述: 述古堂本9の篆体
 邨: 那高漢本34の篆体
 ● 津本と汪・述・那本の篆体が符合する場合は行を灰色に塗っている。
 ● 津本が淵本とも汪・述・那本とも異なる場合には項番と対応字のみ灰色に塗っている。

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邨
K00181	𠂔	01	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K00458	𠂔	02	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K01040	𠂔	03	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K01193	𠂔	04	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K01225	𠂔	04	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K01349	𠂔	04	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K01556	𠂔	05	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K01751	𠂔	05	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K02606	𠂔	07	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K02757	於	07	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨
K02989	𠂔	08	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	邨

表 3: 淵本の篆体が他版本に比して部品が増減するもの

凡例は表 2 を参照。

項番	対応字	巻	毛 5	淵	津	汪	述	耶
K00193	瑛	01	瑛	瑛	瑛	瑛	瑛	瑛
K00490	蒲、蒲	02	蒲	蒲	蒲	蒲	蒲	蒲
K00654	筱、筱	02	筱	筱	筱	筱	筱	筱
K00661	蔓、蔓	02	蔓	蔓	蔓	蔓	蔓	蔓
K00664	芻	02	芻	芻	芻	芻	芻	芻
K00703	藎、藎	02	藎	藎	藎	藎	藎	藎
K00732	蘇	02	蘇	蘇	蘇	蘇	蘇	蘇
K00751	蔣	02	蔣	蔣	蔣	蔣	蔣	蔣
K00980	噲	03	噲	噲	噲	噲	噲	噲
K01017	冏	03	冏	冏	冏	冏	冏	冏
K01035	歛	03	歛	歛	歛	歛	歛	歛
K01502	壘	04	壘	壘	壘	壘	壘	壘
K01529	龠	04	龠	龠	龠	龠	龠	龠
K01542	龠	05	龠	龠	龠	龠	龠	龠
K01783	龠	05	龠	龠	龠	龠	龠	龠

項番	対応字	巻	毛 5	淵	津	汪	述	耶
K09142	由	24	由	由	由	由	由	由
K09203	玦	24	玦	玦	玦	玦	玦	玦
K09480	颯	25	颯	颯	颯	颯	颯	颯
K09488	絮	25	絮	絮	絮	絮	絮	絮
K09499	糴	25	糴	糴	糴	糴	糴	糴
K09500	融、融	25	融	融	融	融	融	融
K09778	凡	26	凡	凡	凡	凡	凡	凡
K09985	夔	26	夔	夔	夔	夔	夔	夔
K10089	鍤、鍤	27	鍤	鍤	鍤	鍤	鍤	鍤
K10201	鍤	27	鍤	鍤	鍤	鍤	鍤	鍤
K10265	且	27	且	且	且	且	且	且
K10550	萬、萬、万	28	萬	萬	萬	萬	萬	萬
K10628	非	28	非	非	非	非	非	非
K10632	巳	28	巳	巳	巳	巳	巳	巳

項番	対応字	巻	毛 5	淵	津	汪	述	耶
K06939	友	19	友	友	友	友	友	友
K07099	照、照	19	照	照	照	照	照	照
K07224	夊	20	夊	夊	夊	夊	夊	夊
K07363	恢	20	恢	恢	恢	恢	恢	恢
K07391	意	20	意	意	意	意	意	意
K07405	懸	20	懸	懸	懸	懸	懸	懸
K07751	漑、漑	21	漑	漑	漑	漑	漑	漑
K07995	冎、冎	21	冎	冎	冎	冎	冎	冎
K08454	慮	23	慮	慮	慮	慮	慮	慮
K08566	扌	23	扌	扌	扌	扌	扌	扌
K08806	婚	24	婚	婚	婚	婚	婚	婚
K08807	慶、慶	24	慶	慶	慶	慶	慶	慶
K08821	母	24	母	母	母	母	母	母
K09047	弗	24	弗	弗	弗	弗	弗	弗
K09104	望	24	望	望	望	望	望	望
K09106	无	24	无	无	无	无	无	无

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邴
K04092	磚	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04125	鉉	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04173	棧	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04194	榜	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04292	棘	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04406	費	12	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04542	鄴	12	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05190	臙	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05193	臙	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05194	臙	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05255	癢	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05293	癢	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05339	蹊	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05420	响	14	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05631	僂	15	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K05899	衰	16	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邴
K03468	唐	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03475	慶	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03476	勳	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03506	尙	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03573	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03638	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03706	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03708	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03750	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03785	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03788	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03791	踏	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03818	尙	10	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03871	尙	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03985	尙	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K04016	号	11	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邴
K01886	暇	05	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02413	翰	07	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02575	苜	07	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02623	鸕	07	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02746	𦵏	07	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02779	意	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02808	脊	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02813	脊	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02822	𦵏	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K02839	職	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03034	眞	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03044	隄	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03137	𦵏	08	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03372	莫	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03395	盧	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴
K03425	𦵏	09	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	𦵏	邴

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	邴
K09629	蝨	25	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09888	堞	26	堞	堞	堞	堞	堞	堞
K09894	壘	26	壘	壘	壘	壘	壘	壘
K10120	鉤	27	鉤	鉤	鉤	鉤	鉤	鉤
K10154	鈇	27	鈇	鈇	鈇	鈇	鈇	鈇
K10223	鈇	27	鈇	鈇	鈇	鈇	鈇	鈇
K10875	範	27	範	範	範	範	範	範
K10465	陸	28	陸	陸	陸	陸	陸	陸
K10500	陸	28	陸	陸	陸	陸	陸	陸
K10572	𧈧	28	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K10646	𧈧	28	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K10664	𧈧	28	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K10705	𧈧, 𧈧	28	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	邴
K08184	霰	22	霰	霰	霰	霰	霰	霰
K08199	霰, 霰	22	霰	霰	霰	霰	霰	霰
K08301	𧈧	22	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08406	𧈧	23	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08408	𧈧	23	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08431	𧈧, 𧈧	23	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08588	𧈧, 𧈧	23	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08775	𧈧	23	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08879	𧈧	24	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08977	𧈧	24	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09016	𧈧	24	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09171	𧈧	24	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09268	𧈧	25	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09309	𧈧	25	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09875	𧈧	25	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K09478	𧈧	25	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	邴
K06901	𧈧, 𧈧	16	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K06824	𧈧	17	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K06875	𧈧	17	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K06633	𧈧, 𧈧	18	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K06860	𧈧	19	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07021	𧈧	19	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07035	𧈧	19	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07246	𧈧	20	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07292	𧈧	20	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07624	𧈧, 𧈧, 𧈧	21	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07749	𧈧	21	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K07786	𧈧	21	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08037	𧈧	21	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08040	𧈧	21	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08069	𧈧	21	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧
K08151	𧈧, 𧈧	22	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧

表 4: 淵本の篆体が他版本の異構字であるもの
凡例は表 2 を参照。

項番	対応字	卷	毛 5	淵	津	汪	述	郝
K00078	械	01	禱	禱	禱	禱	禱	禱
K00135	壁	01	壁	壁	壁	壁	壁	壁
K00149	瑁	01	瑁	瑁	瑁	瑁	瑁	瑁
K00191	塾	01	塾	塾	塾	塾	塾	塾
K00240	塾	01	塾	塾	塾	塾	塾	塾
K00580	莊	02	莊	莊	莊	莊	莊	莊
K00823	隼	03	隼	隼	隼	隼	隼	隼
K00883	窓	03	窓	窓	窓	窓	窓	窓
K00915	和、 <small>和、<small>和</small></small>	03	和	和	和	和	和	和
K01412	臚	04	臚	臚	臚	臚	臚	臚
K01447	燈	04	燈	燈	燈	燈	燈	燈
K01549	詒	05	詒	詒	詒	詒	詒	詒
K01711	馨	05	馨	馨	馨	馨	馨	馨
K01759	嘗	05	嘗	嘗	嘗	嘗	嘗	嘗
K01804	膳	05	膳	膳	膳	膳	膳	膳

項番	対応字	卷	毛 5	淵	津	汪	述	郝
K01809	贖	05	贖	贖	贖	贖	贖	贖
K01867	楯	05	楯	楯	楯	楯	楯	楯
K01878	葦	05	葦	葦	葦	葦	葦	葦
K01970	蕤	06	蕤	蕤	蕤	蕤	蕤	蕤
K01983	輦	06	輦	輦	輦	輦	輦	輦
K01996	輦	06	輦	輦	輦	輦	輦	輦
K02330	眇、 <small>眇</small>	07	眇	眇	眇	眇	眇	眇
K02365	道	07	道	道	道	道	道	道
K02369	眇	07	眇	眇	眇	眇	眇	眇
K02446	昔	07	昔	昔	昔	昔	昔	昔
K02486	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02492	翺	07	翺	翺	翺	翺	翺	翺
K02501	翺、 <small>翺</small>	07	翺	翺	翺	翺	翺	翺
K02525	銛	07	銛	銛	銛	銛	銛	銛
K02558	隼	07	隼	隼	隼	隼	隼	隼
K02563	隼	07	隼	隼	隼	隼	隼	隼

項番	対応字	卷	毛 5	淵	津	汪	述	郝
K02584	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02603	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02636	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02652	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02655	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02656	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02683	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02685	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02689	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02692	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02699	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02700	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02716	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02717	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
K02720	鞞	07	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞	鞞

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	郝
K03490	麟	09	麟	麟	麟	麟	麟	麟
K03503	鹽	09	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽
K03512	醴	09	醴	醴	醴	醴	醴	醴
K03515	盈	09	盈	盈	盈	盈	盈	盈
K03589	養	10	養	養	養	養	養	養
K03591	桑	10	桑	桑	桑	桑	桑	桑
K03598	養	10	養	養	養	養	養	養
K03608	養	10	養	養	養	養	養	養
K03629	養	10	養	養	養	養	養	養
K03690	麟	10	麟	麟	麟	麟	麟	麟
K03691	給	10	給	給	給	給	給	給
K03866	裕	11	裕	裕	裕	裕	裕	裕
K03970	樂	11	樂	樂	樂	樂	樂	樂
K03973	樂	11	樂	樂	樂	樂	樂	樂
K04010	樂	11	樂	樂	樂	樂	樂	樂
K04163	樂	11	樂	樂	樂	樂	樂	樂

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	郝
K03109	罰, 罰	08	罰	罰	罰	罰	罰	罰
K03163	背	08	背	背	背	背	背	背
K03246	徒	09	徒	徒	徒	徒	徒	徒
K03370	架	09	架	架	架	架	架	架
K03396	固	09	固	固	固	固	固	固
K03417	平, 兮	09	兮	兮	兮	兮	兮	兮
K03437	鼓	09	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓
K03438	鼓	09	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓
K03470	影	09	影	影	影	影	影	影
K03477	獻	09	獻	獻	獻	獻	獻	獻
K03479	統	09	統	統	統	統	統	統
K03480	離	09	離	離	離	離	離	離
K03481	號	09	號	號	號	號	號	號
K03482	彪	09	彪	彪	彪	彪	彪	彪
K03483	統	09	統	統	統	統	統	統
K03486	統	09	統	統	統	統	統	統

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	郝
K02723	鷹	07	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹
K02725	雛	07	雛	雛	雛	雛	雛	雛
K02740	鳩	07	鳩	鳩	鳩	鳩	鳩	鳩
K02745	鸞	07	鸞	鸞	鸞	鸞	鸞	鸞
K02753	鸞	07	鸞	鸞	鸞	鸞	鸞	鸞
K02754	鸞	07	鸞	鸞	鸞	鸞	鸞	鸞
K02804	鷓	08	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓
K02826	鷓	08	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓
K02849	危, 危, 危	08	危	危	危	危	危	危
K02850	鷓	08	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓
K02887	鷹	08	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹
K02923	鷹, 鷹	08	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹
K02941	白	08	白	白	白	白	白	白
K02975	胡	08	胡	胡	胡	胡	胡	胡
K03037	鷹	08	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹	鷹
K03050	鷓	08	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邴
K05939	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06028	聾, 聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06051	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06111	聾, 聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06119	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06193	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06210	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06211	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06261	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06262	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06267	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06268	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06269	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06281	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06294	聾, 聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K06296	聾	17	聾	聾	聾	聾	聾	聾

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邴
K05107	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05220	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05321	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05323	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05338	聾, 聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05399	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05413	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05417	聾	14	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05730	聾	15	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05822	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05856	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05893	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05895	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05905	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05912	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K05915	聾	16	聾	聾	聾	聾	聾	聾

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	邴
K04180	聾	11	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04238	聾	11	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04348	聾	12	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04398	聾	12	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04473	聾	12	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04530	聾	12	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04671	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04680	聾, 聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04771	聾, 聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04863	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04895	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04899	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04946	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04961	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04977	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾
K04981	聾	13	聾	聾	聾	聾	聾	聾

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	郝
K06460	卓	18	卓	卓	卓	卓	卓	卓
K06470	橙	18	橙	橙	橙	橙	橙	橙
K06570	焔	18	焔	焔	焔	焔	焔	焔
K06571	焔	18	焔	焔	焔	焔	焔	焔
K06664	蒙、莽	18	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K06746	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K06757	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K06847	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K06879	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07000	蒙、蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07027	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07039	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07047	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07049	蒙、蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07066	蒙、蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
K07096	蒙	19	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	郝
K06317	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06318	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06319	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06320	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06321	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06322	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06325	獲、獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06326	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06327	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06328	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06329	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06330	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06352	印	17	印	印	印	印	印	印
K06362	辨	17	辨	辨	辨	辨	辨	辨
K06404	獲	17	獲	獲	獲	獲	獲	獲
K06440	獲	18	獲	獲	獲	獲	獲	獲

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	郝
K06297	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06298	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06299	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06300	髡、髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06301	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06302	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06304	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06305	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06306	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06307	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06308	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06309	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06310	髡、髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06311	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06315	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡
K06316	髡	17	髡	髡	髡	髡	髡	髡

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	邨
K07852	漸	21	漸	漸	漸	漸	漸	邨
K07899	瀧	21	瀧	瀧	瀧	瀧	瀧	邨
K07951	瀆	21	瀆	瀆	瀆	瀆	瀆	邨
K08140	澗	22	澗	澗	澗	澗	澗	邨
K08228	澗	22	澗	澗	澗	澗	澗	邨
K08281	澗	22	澗	澗	澗	澗	澗	邨
K08379	瀧、着	23	瀧	瀧	瀧	瀧	瀧	邨
K08542	擊	23	擊	擊	擊	擊	擊	邨
K08593	疾	23	疾	疾	疾	疾	疾	邨
K08642	擊	23	擊	擊	擊	擊	擊	邨
K08649	失	23	失	失	失	失	失	邨
K08679	擊	23	擊	擊	擊	擊	擊	邨
K08705	擊	23	擊	擊	擊	擊	擊	邨
K08749	擊	23	擊	擊	擊	擊	擊	邨
K08864	改	24	改	改	改	改	改	邨
K08891	改	24	改	改	改	改	改	邨

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	邨
K07436	急	20	急	急	急	急	急	邨
K07437	辨	20	辨	辨	辨	辨	辨	邨
K07449	忒	20	忒	忒	忒	忒	忒	邨
K07457	擬	20	擬	擬	擬	擬	擬	邨
K07470	懲	20	懲	懲	懲	懲	懲	邨
K07476	忒	20	忒	忒	忒	忒	忒	邨
K07486	歎	20	歎	歎	歎	歎	歎	邨
K07501	急	20	急	急	急	急	急	邨
K07506	懲	20	懲	懲	懲	懲	懲	邨
K07539	悲	20	悲	悲	悲	悲	悲	邨
K07554	价	20	价	价	价	价	价	邨
K07561	愁、慙	20	愁	愁	愁	愁	愁	邨
K07571	憾	20	憾	憾	憾	憾	憾	邨
K07577	慙	20	慙	慙	慙	慙	慙	邨
K07718	頹	21	頹	頹	頹	頹	頹	邨
K07738	瀧	21	瀧	瀧	瀧	瀧	瀧	邨

項番	対応字	卷	毛5	淵	津	汪	述	邨
K07126	蕪、費	19	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07128	蕪	19	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07139	蕪	19	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07157	蕪	19	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07163	蕪、党	19	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07193	蕪	19	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07210	蕪、裁	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07235	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07262	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07306	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07342	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07344	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07392	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07408	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07412	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨
K07423	蕪	20	蕪	蕪	蕪	蕪	蕪	邨

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	祁
K10882	輩	27	輩	輩	輩	輩	輩	輩
K10480	輩, 晉	28	輩	輩	輩	輩	輩	輩
K10580	帖	28	帖	帖	帖	帖	帖	帖
K10650	齋	28	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K10710	齋	28	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K10718	齋	28	齋	齋	齋	齋	齋	齋

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	祁
K09556	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09567	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09576	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09603	齋, 齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09612	齋, 齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09641	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09671	齋, 齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09686	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09714	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09722	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09732	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09799	齋	26	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09916	齋	26	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K10017	齋	26	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K10042	齋	26	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K10180	齋, 齋	27	齋	齋	齋	齋	齋	齋

項番	対応字	巻	毛5	淵	津	汪	述	祁
K08911	齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K08956	齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09011	齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09017	齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09068	齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09082	齋, 齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09174	齋	24	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09249	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09345	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09369	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09386	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09486	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09531	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09532	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09540	齋, 齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋
K09551	齋	25	齋	齋	齋	齋	齋	齋

3.2.1 淵本の篆体がほぼ別字であるもの

淵本の篆体が他版本に比してほぼ別字となっているものが文献[14]の表2に整理されているが、これに津本の篆体を追加したものを本稿の表2に示した。灰色で塗られている行は、津本の篆体が淵本とは異なり、他版本と同じになっているものである。津本の篆体が淵本・他版本とも異なる津本特有の場合は、項番号のみ灰色に塗っている。

多くの箇所において、津本は淵本と同じ篆体を示すと言える。津本特有の篆体はK08821(母)、K09047(弗)、K10201(鏝)の程度である。しかし部分的に津本が他版本と同様の篆体を示す場合があり、巻17～21の範囲では、大半が他版本と同様の篆体を示す。

3.2.2 淵本の篆体は部品が増減するもの

淵本の篆体は他版本に比べて部品の増減があるものが文献[14]の表3に整理されているが、これに津本の篆体を追加したものを本稿の表3に示した。灰色の塗り方は表2と同様である。



ここでも多くの箇所において、津本は淵本と同じ篆体を示す。津本が他版本と同様の篆体を示す例は巻19～22の範囲に集中しているが、その直前の巻17～18の範囲では津本の篆体は淵本と同様であることには注意が必要である(表2ではこの範囲の篆体は淵本とは異なり、他版本と同様になっていた)。

また、ここでは津本独自の篆体となっているものは見つからなかった。

3.2.3 淵本の篆体は異構字であるもの

淵本の篆体が他版本の字形の異構字になっているものが文献[14]の表4に列挙されているが、これに津本の篆体を追加したものを本稿の表4に示す。灰色の塗り方は表2と同様である。

ここでも多くの箇所において、津本は淵本と同じ篆体を示す。津本が他版本と同様の篆体を示す例は巻18～22に集中している。ただし、髟部(表4のK06294～K06330)の字形差を

- 「」のように上に載せる(淵本)
- 「」のように囲む(他版本)

というデザインの一貫性と考えると除外するならば、巻17でも津本の篆体は他版本と同様と見て良いであろう。

3.3 小結

まず、文献[14]が収集した淵本特有の篆体の多くは津本にも見える一方、淵本とも他版本とも異なる「津本特有の篆体」はかなり少ない。従って、淵本特有の篆体は、淵本の書写作业の際に偶然発生したのではなく、四庫全書の底本に由来するという推定は維持して良いであろう。

しかし、巻17～22の範囲ではしばしば他本と同様の篆体になっており、さらに巻17では淵本の脱落・錯位が解消している。筆写をやり直した結果、特に意図せずに解消した可能性もあるが、巻17～22の範囲に集中していることから、何かの改変が加えられていると思われる。

4 考察

本稿の調査では、文淵閣本と文津閣本の篆体はよく符合するという結果を得た。しかし、巻17～22の範囲では、文津閣本の篆体は文淵閣本と異なり、むしろ他版本に符合する。これが改変の結果だとすれば、どのような資料を使ったと考えられるだろうか。

董氏が汪啓淑本の底本と指摘する翁方綱の校本や、四庫館に提出されていたもう一本の小徐本¹⁹も考えられるが、文淵閣本(書前提要は乾隆46年12月)と文津閣本の間に出現した資料(書前提要は乾隆49年5月)に注目するならば、乾隆47年に出版された汪啓淑本が候補となるだろう。

汪啓淑本は多くの篆体が汲古閣本に近い²⁰、汲古閣本によるのか、汪啓淑本によるのかを篆体だけから判断することは難しい。そこで、巻17の文淵閣本で篆体・説解とも脱落し、かつ文津閣本がこれらを含むK06233(顛)、K06234(顛)、K06323(髻)の3項を確認すると、その反切は汲古閣本ではなく汪啓淑本に符合する²¹。従って汲古閣本によるものではない。

またさらに、巻17では文淵閣本の脱落が文津閣本で解消している例が見られるが、述古堂本・祁寯藻本は含むが汪啓淑本では脱落しているところのK06289(顛)～K06291(髻)、K06293(髻)、K06295(髻)、K06303(髻)は、これらは文津閣本でも脱落したままである。これも改変に用いられ

た資料が汪啓淑本の系列であることの傍証となるだろう。

それでは、汪啓淑本そのものを用いたか、董氏が指摘する汪啓淑本の底本となった翁方綱校本を用いたかは判断できるだろうか。既にかいたように汪啓淑本の篆体は汲古閣本に近い。しかし、翁方綱校本にも、大徐本との差を朱筆で書き込んだ部分があるため、採り方によっては翁方綱校本によって改変しても汲古閣本字形に似る可能性がある。そこで、

- 翁方綱校本には(おそらく文字学的には有意な差ではないと判断されたため)篆体字形に関する書き込みが無い
- 篆体が、汲古閣本・汪啓淑本のグループと、述古堂本・祁寯藻本のグループの2つに分けることができ、翁方綱校本の篆体は後者に似るという条件を満たすものを探すと、表2ではK07391(意)、K07405(懸)、表4ではK06210(貽)などが見つかる。翁方綱校本を参照して改変したのであれば、汪啓淑本の篆体には倣わない筈である。










項番	文津閣本	汪啓淑本	翁方綱本
K07391			
K07405			
K06210			

図9: 文津閣本、汪啓淑本、翁方綱校本の比較

これらの項目で文津閣本・汪啓淑本・翁方綱校本の篆体を比較したものが、図9である。文津閣本の篆体は明らかに汪啓淑本に近く、改変には汪啓淑本が用いられたと考えて良いであろう。

5 結論、今後の課題

5.1 本稿の調査の結論

本稿の調査結果から以下の結論を得る。

5.1.1 書写品質について

戸崎氏が『唐柳先生集』の大規模な欠落をもとに文津閣本の品質問題を指摘しているが、『繫傳』においても文津閣本は文淵閣本より品質が低い。これは、両本の対応不能部分の調査のうち、脱篆・冗篆・錯位といった誤りが多いことから言える。

特に、冗篆のような、説解を全く読まずに書写しても明らかに誤写と判るものが残っていることは特徴的である。これらの誤りから、文津閣本は、説解を先に書き、後に篆体を書き込むという2段階の書写作業によったと思われる²²。

また、このような誤りが残っていることから、篆体を書写した作業者個人では誤写のあった葉を書き直すことができない分業体制であったことが窺える。

5.1.2 巻17～22の範囲の改変について

少なくとも巻17～22の範囲では、汪啓淑本による改変が加わっていると考えられるが、その範囲でも表1に示すように脱篆の誤写が発生している。また、推定される改変の範囲も表2からは巻17～21、表3からは巻19～22、表4からは巻17～22であり、完全には合致していない。このことは、改変を加える基準にも揺れがあったことを示唆しており²³、全編にわたり一貫した作業を行った結果とは考え難い。

5.1.3 四庫全書本特有の篆体について

文献[14]が文淵閣本をもとに採集した四庫全書本特有の篆体の多くは、文津閣本にも見える。従って、多くは書写の際に発生した誤写ではなく、その底本に由来するという推測を維持できるだろう²⁴。ただし、巻17～22の範囲では汪啓淑本を用いたと思われる改変が加わっており、この範囲での文淵閣本の篆体についてはさらなる検証が必要であろう。

5.2 今後の課題

本稿の調査結果からは、以下の課題が残ると言える。

5.2.1 書前提要の変化と改変の関係

まず未解決の問題として、文淵閣本と文津閣本での書前提要の変化の背景がある。提要の変化がすなわち資料評価の変化を示しており、文津閣本に改変が加わっているのではないか、という点が本稿の興味の一つであった。

篆体の比較から、文津閣本には汪啓淑本を用いたと思われる改変が加わっていることが判ったが、その改変は巻17～22の範囲という、全体の1/4程度であり、正式な校訂作業として改変したとは考え難い。このことについては、馮氏が指摘する文津閣本『大廣益會玉篇』での澤存堂本の取り込みは均等かつ全面的なものかという類例検証も必要と思われる。

さらに他の四庫全書であるところの文淵閣本は、本稿執筆時点では影印出版やネットワークサービスなどの計画は見当たらず、調査が困難だが²⁵、文淵閣本と文津閣本の間には書写されているため、書前提要の変化²⁶と、汪啓淑本による改変が、連鎖しているのか、独立なものかを明らかにできる可能性がある。

5.2.2 四庫全書本の書写品質

文献[14]では、大徐本について、四庫全書薈要本とその底本の汲古閣本を比較し、四庫全書の書写品質について評価している。ここでは、汲古閣本の誤りの修正と再配置が目立った改変であり、これをもとに文淵閣本の書写も誤写は少ないであろうと推定した。

しかし、本稿で調査した文津閣本では、篆体・説解のずれの連鎖(錯位(B))や、冗篆のような文津閣本特有の誤りが見られた。

このことを踏まえると、文淵閣本・文津閣本の大徐本についても精査し²⁷、書写品質の評価が必要であろう。現在、文津閣本の大徐本の篆体について対比表を作成しているが、少なくとも一件、巻12の中の「𦵑」の箇所では冗篆が見つかっている。

謝辞

本稿は科研費課題番号16K004600A, 19K12716の補助を受けました。本稿の調査は文献[14]に関する、董婧宸博士との議論から始まっています。四庫全書の調査方法と取り扱いに関しては笹原宏之先生に多くの情報を頂きました。また、大居司氏、王奕樺博士、東ヶ崎祐一先生、白石将人先生、大西克也先生、高橋由利子先生には有益な情報と議論を頂きました。皆様に心より感謝致します。

参考文献

- [1] 許慎:『説文解字』, 中華書局(1963.12), ISBN 7101002609.
- [2] 高久由美:「『説文解字』祖本への接近(上):小篆の字形を中心として」, 県立新潟女子短期大学研究紀要, 第36集(1999.3), p.129-138, <http://id.nii.ac.jp/1661/00000515/> (2019/08/27閲覧)
- [3] 福田哲之:「唐写本『説文解字』口部断簡論考」, 書学書道史研究, 第13号(2003), p.43-53, <https://doi.org/10.11166/shogakushodoshi1991.2003.43> (2019/08/27閲覧).
- [4] 徐鍇:『説文解字繫傳』(祁寯藻本), 中華書局(2017.5), ISBN 9787101125474.
- [5] 翁敏修:「《永樂大典》引徐鍇《説文繫傳》考」, 第二十九屆中國文字學國際學術研討會論文集, p.189-200, http://www.fyu.url.tw/cp/29th/29th_P189.pdf (2019/08/20閲覧).
- [6] 徐鍇:『説文解字篆韻譜』(馮桂芬翻刻10卷本), 同治6, 国立国会図書館請求記号821-Z49s.
- [7] 工藤早恵:「十卷本『説文解字篆韻譜』について」, 東京都立大学人文学報, 213号(1990), p.49-63.
- [8] 糸原敏章:「張次立による『説文解字繫傳』の校訂について」, 東京大学中国語中国文学研究室紀要, 12巻(2009), p.1-24.
- [9] 徐鍇:『説文解字通釋』(述古堂本), 四部叢刊正編, 大本原式精印, 台湾商務印書館(1979).
- [10] 鈴木俊哉:「説文解字篆韻譜 - 説文解字繫傳小篆対照表」, 1.0版, <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047569> (2019/08/27閲覧).
- [11] 鈴木俊哉、鈴木敦、菅谷克行:「説文解字篆韻譜に見える説文解字繫傳25卷所収文字の状況」, 情処研報, 2017-CH-113, p.1-8, <http://id.nii.ac.jp/1001/00177356/> (2019/08/27閲覧).
- [12] 徐鍇:『説文解字繫傳』(汪啓淑本), 東北大学附属図書館所蔵, 請求番号教養821-99, また国立公文書館所蔵本 <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046566> (2019/08/27閲覧).
- [13] 徐鍇:説文繫傳(文淵閣本), <https://archive.org/details/06050623.cn-06050633.cn> (2019/08/27閲覧).
- [14] 鈴木俊哉:「四庫全書本『説文解字繫傳』に見える小篆異体字」, 広島大学大学院総合科学研究科

- 紀要・II, 環境科学研究, 13 卷(2018), p.65-95, <http://doi.org/10.15027/47118> (2019/08/27 閲覧).
- [15] 楊洪升:「四庫館私家抄校書考略」, 文献, 2013 年 1 月第 1 期, p.56-75.
- [16] 翁方綱手校并題記旧鈔本『說文解字通釋』、台湾国家図書館所蔵、索書号 110.21 00922
- [17] 董婧宸:「傳抄、借閱与刊刻: 清代《說文解字》の流考」, 北京師範大学博士后研究報告, 2017 年 7 月, p.69.
- [18] 許慎:『說文解字 15 卷, 四庫全書薈要 乾隆御覽本』, <https://archive.org/details/06081956.cn - 06081963.cn> (2019/08/27 閲覧).
- [19] 許慎:『說文解字 15 卷, 據汲古閣本重刊 有惠棟席世昌校語席湜識語圖記』, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A020menu.html> (2019/08/27 閲覧).
- [20] ISO/IEC JTC1/SC2: “Ideographic Description Characters”, Information Technology – Universal Coded Character Set (UCS): 2014-09-01, Annex I, p.2423-2426.
- [21] 笹原宏之:「奇妙な象形文字の出現と変容・補遺前編 - 「龍」の象形文字のその後」, 墨, 芸術新聞社, 249 号 (2017), p.142-147.
- [22] Cheng Yu Tung East Asian Library: “Siku Quanshu (四庫全書, SKQS) Available Now Through the Internet Archive”, <http://ealuoft.blogspot.com/2010/01/siku-quanshu-skqs-available-now-through.html> (2018/08/20 閲覧).
- [23] 『文津閣四庫全書』, 商務印書館 (2005.12)
- [24] 吾妻重二:「『統修四庫全書』と四庫関連叢書」, 関西大学図書館フォーラム, 9 卷 (2004), p.18-22, <http://hdl.handle.net/10112/10595> (2019/08/27 閲覧).
- [25] 商務印書館編集部:「編纂與流傳 文津閣《四庫全書》出版前言」<http://culture.people.com.cn/BIG5/40466/40468/4330920.html> (2018/08/20 閲覧)
- [26] 毎日頭條:「影印文津閣本《四庫全書》重回故宮: 結束有書架無古書歷史」, <https://kknews.cc/culture/6emkv1.html> (2019/08/17 閲覧)
- [27] 華夏經緯網:「影印文津閣本《四庫全書》入藏故宮」, <http://big5.huaxia.com/zhwh/whrd/2016/08/4962687.html> (2019/08/17 閲覧)
- [28] 王鵬凱:「紀昀在《四庫全書》館 -- 《大清高宗純皇帝實錄》爲考察中心」, 東海大學圖書館館刊, 第 14 期 (2017), p.20-40.
- [29] 戸崎哲彦:「清内府蔵本『廣註釋音辯唐柳先生集』考」, 島大言語文化, 35 卷 (2013), p.1-33, <http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/28673>
- [30] 馮先思:「四庫本《玉篇》版本考」, 図書館雜誌, 2015 年第 8 期, p.104-107, 112.
- [31] 永瑢, 紀昀:『天津圖書館藏紀曉嵐刪定《四庫全書總目》稿本』, 國家圖書館出版社 (2011.3), ISBN 9787501344352.
- [32] 藍文欽:「四庫全書文淵、文溯、文津三閣書前提要之文字比勘: 以三百六十五種書前提要為例」, 圖書資訊學刊, 第 13 卷第 1 期 (2015.6), p.33-68, [http://doi.org/10.6182/jlis.2015.13\(1\).033](http://doi.org/10.6182/jlis.2015.13(1).033) (2019/08/27 閲覧).
- [33] 鈴木俊哉:「『說文解字繫傳』諸版小篆対比表について」(2.0 版), <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00046567> (2019/08/30 閲覧)
- [34] 徐鍇:『說文解字繫傳』(祁寯藻本, 道光 19 年版影印), 華文書局 (1971).
- [35] 郭立暄:『中國古籍原刻翻刻與初印後印研究』, 中西書局 (2015), ISBN 9787547508558, 実例篇 p.393-405.
- [36] 吳慰祖:『四庫採進書目』, 商務印書館 (1960).
- [37] 金毓黻:『文溯閣四庫全書提要』, 遼海書社, 康德 2, 卷 25, 經部 25 小學類, 葉 2 ~ 3, <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2568986/14> (2019/08/20 閲覧)
- [38] 甘肅省図書館編:『影印文溯閣四庫全書四種』, 上海古籍出版社, 2003, ISBN7532535053.
- [39] 絲路明珠網:「甘肅省文溯閣《四庫全書》3.6 萬冊將影印出版供讀者查閱」, 2017-09-24, <http://www.gstv.com.cn/news/folder45/2017-09-24/541627.html> (2019/08/20 閲覧)
- [40] 吾妻重二:「内藤文庫所蔵の文溯閣四庫全書について」, 関西大学東西学術研究所紀要, 52 卷 (2019), p.15-40, <http://hdl.handle.net/10112/00017113> (2019/08/26 閲覧)
- [41] 高橋由利子:「官版『說文解字』の依拠した版本について」, お茶の水女子大学中国文学会報 (17), 1998-04, p.155-171, <http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000032252> (2019/11/14 閲覧)

正誤表

広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究 14 卷, 「四庫全書本『繫傳』の調査・文淵閣本と文津閣本」について脚注が脱落しておりました。原稿に含まれていた脚注は以下の通りです。お詫びして訂正いたします。

- 1) 南宋代に大徐本を韻書排列にした『説文解字五音韻譜』を編んだ李燾は、『繫傳』40 卷のうち 7~8 巻しか見ることができなかったという。翁敏修氏によれば、明代の『永樂大典』の中で『繫傳』が参照されてはいるものの、明代に『繫傳』が刊刻された記録は見つかっていない[5]。
- 2) この立場を取る様々な概説書・研究書は文献[14]に整理されている。
- 3) 文献[17] p.44, 脚注 4.
- 4) 翁方綱は紀昀の前任者として四庫館で整理を行っていた。
- 5) 汲古閣本の最終段階の修訂で追加した古文・或体などは本来の位置に挿入できず(大半の版木を彫り直すことになるため)、各部末の余白部分を補刻して追加してある。薈要本では、これらを本来の位置に移動している。
- 6) 文献[14]でも文津閣本の状況確認を今後の課題として残しているが、董氏からも事業の主旨および規模の違いに関するコメントを頂いた。
- 7) 博物館向けには原本の体裁のまま影印したものも作られたようである[26][27]。
- 8) 王鵬凱氏が整理するように[28]、この勅令は乾隆帝が文津閣本を閲覧している最中に多数の欠巻に気づいたことから始まっている。細かい誤字脱字の問題ではない。
- 9) この文献(音辯本)は柳宗元の文章を収集したもの(柳先生集)に対して、劉欽が注釈を加えたものである。柳先生集に対して韓醇が注釈を加えたもの(詒訓本)や、魏仲舉が注釈を加えたもの(五百家本)などが存在する。文津閣本では音辯本に詒訓本や五百家本が混ざるといふ。
- 10) 四庫全書提要では澤存堂本や曹寅本に対し、実際には陳彭年の大廣益會玉篇なのに、唐代の孫強玉篇(上元本玉篇)に見せかけようと削改していると強く批判している。
- 11) しかし四庫採進書目[36]には紀昀がこれを提出した記録はない。
- 12) 馮氏は四庫全書本の底本は曹寅本であるとする。
- 13) 乾隆 52 年からの四庫全書の再校正については、紀昀が提要を校正した残稿と思われるものが天津図書館に残っており、この影印が文献[31]として出版されている。しかし、この中には説文関係の提要は含まれておらず(字書類の提要自体が少ない)、この文津閣本の書前提要が再校で問題なしとされたのか、確認漏れなのかは不明である。提要の変更の統計的な分析に関しては藍文欽氏の研究[32]が詳しい。
- 14) 説文は K05883(羸)は形符を「衣」、聲符を「羸」と解釈するので、「羸」は形符を「果」に置き換えた結果と考えることもできる。しかし、説文においては「果」は部首字ではない。ま

た、淵本・津本とも K03034(羸)を「羸」に誤っており、重出である。段注本では K05884(裸)の項に於いて「羸」を俗字として退けている。

- 15) 淵本の楷書字形は「𠄎人𠄎二二目」のように訛る。
- 16) 津本の説解も他版本と同様に「聲」を含む。
- 17) K04249(不)での淵本の状況はどちらとも異なるように思われる。
- 18) 現在一般に参照される祁騫藻本は中華書局影印本[4]であるが、郭立暄氏の調査[35]と比較すると、この華文書局影印本[34]は郭氏の分類するところの後印丙本の状態であり、中華書局影印本より改変が少ないと思われる。
- 19) 四庫採進書目[36]によれば、紀昀家蔵本の他に『説文解字通釋』がもう一種四庫館に提出されている。
- 20) 例えば表 2 の K00458(𦏧)、K01349(𦏧)、K04775(𦏧)などを見ると、汪啓淑本は述古堂本や祁騫藻本よりも汲古閣本に近いことは明らかであろう。
- 21) K06233(𦏧)は汲古閣本が「口猥切」に対し汪啓淑本が「口猥反」、またこの項は汲古閣本には徐鍇の按語が無く、汪啓淑本には有る。K06234(𦏧)は「滂禾切」に対し「滂阿反」。K06323(𦏧)は「直追切」に対し「直垂反」。
- 22) 説解の書写の際に篆体の空間の確保をしなかった場合、篆体を書く余地がない脱篆が発生する。また、篆体の書写の際に、篆体を書くべきでない単なる行末の空間に篆体を書き込んでしまうことにより、行をまたいだ冗篆が発生する。またさらに、篆体を書き込む際に見落としがあれば、篆体と説解の対応関係のずれが連鎖する錯位(B)も発生する。篆体と説解を掲出順にそのまま一人で書いている場合は、錯位(A)は発生し得るが、脱篆や冗篆が起きるとは考え難い。
- 23) 最初の段階では淵本の篆体が全く別字に見えるものだけに注目していたものの、次第に微細な字形差も問題視するように変化したと思われる。
- 24) 文献[14]では、これらの篆体が四庫提要で選んでいる紀昀家蔵本に由来すると推測している。これについて、董氏より、四庫提要と四庫全書では底本が異なる場合が少なくないため、四庫全書の底本に由来するとは言えるが、それが紀昀家蔵本であると断定するのは難しいとの意見を頂いた。
- 25) 文溯閣本『繫傳』の書前提要は、文献[37]によれば乾隆 47 年 9 月である。文溯閣本の影印出版[38]はごく僅かな部分だけであり、影印撮影は行われているとされるが[39]、所蔵機関の外部に対してデジタルデータ公開となるのか、冊子体で出版されるのかは不明である。文溯閣本の流伝については文献[40]も参照されたい。
- 26) 文溯閣本『繫傳』の提要は既に問題の部分が削除されている。また、文溯閣本『大廣益會玉篇』も澤存堂本・曹寅本に関する評価が部分的に削除されている。
- 27) 文献[41]および文献[14]で汲古閣本説文解字の 5 次修訂本に微妙に異なる 2 種があると言及されているが、董氏より一方が後人の翻刻本である可能性を指摘された。両本の比較精査も今後の課題としたい。